

[海外研究・教育活動]

海外研究で体験したセレンディピティー

新潟医療福祉大学 副学長 山本 正治

セレンディピティー (Serendipity) を知ったのは40年以上前である。私が大学を卒業した頃、大学紛争の原因となった卒後臨床研修制度 (インターン制度) が混乱していた。そこで私は卒後すぐアメリカで研修を受けようと決意した。

研修先ボストン大学の恩師はある時唐突に「セレンディピティーを知っているか」と質問された。「知らない」と答えると、先生はすぐ「思いがけない発見」であると教えてくれた。また研究の失敗がもとで大発見に至ったエピソードを縷々説明された。この説明は、私の実験が失敗続きで思うように進まないことへの慰めの言葉であったに違いない。

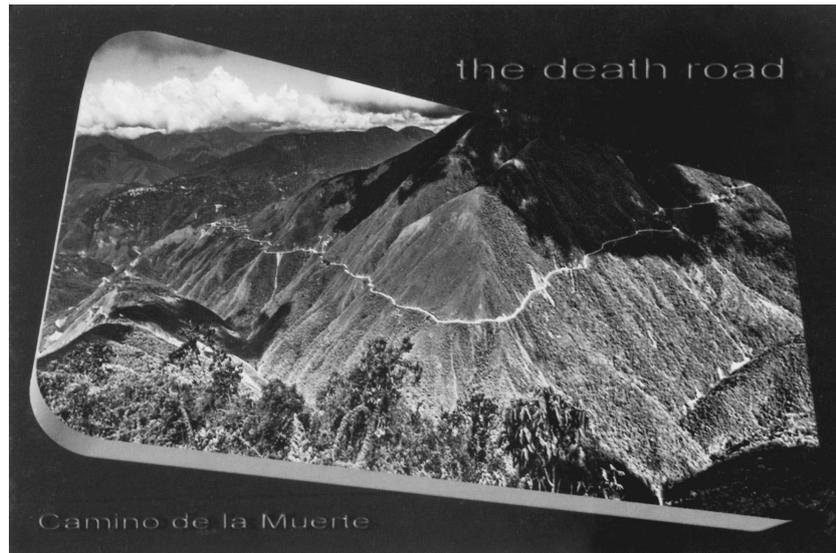
失敗がもとで大発見に至ったエピソードにはペニシリンやリンガー液の発見という古典的なものから、ヘリコバクター・ピロリやバイアグラ等の最近のものまでである。「大発見は必ずしも人間の理性や知力によらず、むしろドジや見落としが偶然それを照らし出したに過ぎない」との箴言もあるほどである。

前任校・新潟大学では「胆のうがんの疫学研究」をライフワークとして取り組んだ。最初のテーマは新潟に多発した胆のうがんの原因を探る研究であった。対がん10年総合戦略研究という国家プロジェクトを、当時の遠藤和男助教授 (現新潟医療福祉大学教授) らと研究を行いそれなりの成果を上げた。その後は好奇心の赴くまま、本症多発国であるチリやハンガリーの研究に着手した。特にチリでの共同研究は19年になるが、研究開始当時にセレンディピティーが働いていたことを、後日知ることになった。

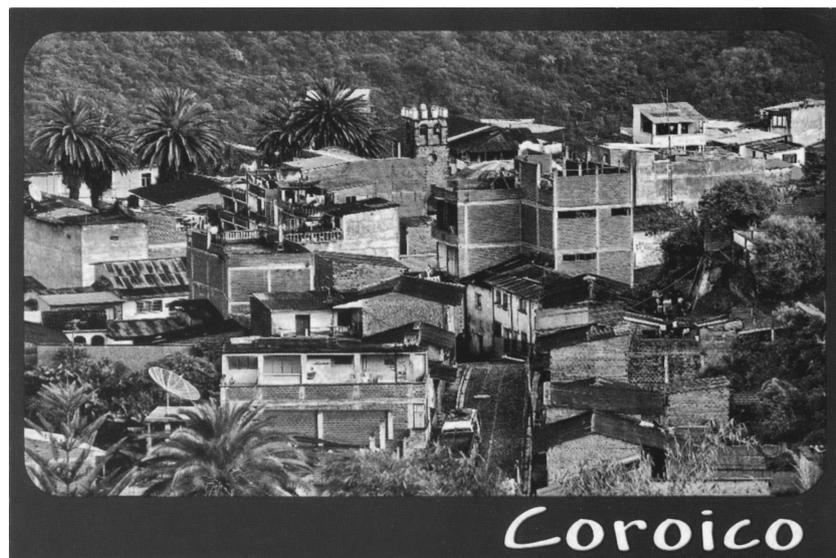
パートナーはチリ大学のイバン・セラ教授であった。まずは症例-対照研究 (患者と健常者間で過去の生活習慣等を比較) に用いる調査票を作成した。原案がひと段落したので、夕食を共にすることになった。その日は代表的なチリ料理ということで、唐辛子の辛味が充分過ぎるほど効いた料理をご馳走になった。しかしその結果は惨めであった。全身から大量の汗が出るし、口内は火照るし、ついに我慢できずにトイレに駆け込み、食べたものを吐いてしまった。その後冷静になってみると、これほど私を苦しめた唐辛子摂取が質問項目に入っていないことに気づいたのである。そこで早速取り入れることになった。その後調査は順調に進み、約1年後に中間集計を行った。その結果は驚くべきものであった。唐辛子摂取が危険因子として浮上したのであった。その後この研究はInternational J Cancerに掲載され、しかもその表紙を飾る栄誉も同時に与えられた。この経緯はまさにセレンディピティーと言ってよいであろう。

胆嚢がんの疫学研究は本学に赴任しても続いている。今年度から新たに科研費を取得し、世界最大の多発国と推測されるボリビアでの研究を開始した。まだ緒についたばかりであるので、将来何がセレンディピティーとなるか3年を終わってみないと分からない。この研究はここ暫く私の知的好奇心をくすぐってやまないであろう。

後記：チリにおける研究の概略及び記録写真等は『どうなる日本の医学・医療-グローバル化を体感した医学研究者の随想』(新潟日報事業社、2009年)を参照願いたい。



The death road：ボリビアの首都ラパス（標高約3600m）からユンガス地方コロイコに至る世界一危険な道路（詳細はインターネット検索で知ることが出来る。絵ハガキを転載）



Coroico：ラパスから標高4600mの峠を越えて辿り着く保養地（1700m）である。周辺にはコカ畑が散在する。また地域住民には胆のうがんが多いとのこと